



北九州市 旦過市場



長崎市 路面電車が通る街並み



大分市「祝祭の広場」



阿南市役所

今年度の活動内容

今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大により、世界中の都市で今までの「暮らし方」が問われ、新たな生活様式への転換が求められた。そのような状況下、「地方暮らし」が持つ価値や魅力が再認識された事で、地方都市にとってはコロナ禍がこの先の活路を見出す好機にもなった。今後もポストコロナ時代を見据えて地方都市のあり方を考えていくことは、地方の生きる道を指し示す上

で重要な意味合いを持つだろう。しかし、移動が制限されたことで、地方に直接赴いて現地調査を行うことは困難であった。従って、今年度の研究活動は昨年度までに得られたデータをもとに報告書や論文をまとめることを中心に行なった。これらの成果物が、集約されていくべき中心市街地や持続可能な低密居住市街地のあり方を考えるための素材となれば幸いである。

調査報告書の作成

2019 年度より行なってきた立地適正化計画に関する全国調査の結果を報告書としてまとめた。線引き・非線引きの両都市について調査結果を記載しており、各々について詳細な分析を行うことで線引きの有無に関わらず網羅的に立地適正化計画の運用実態が整理されている。協力していただいた自治体や関係者への配布を通して、今後の都市政策を考える上での検討材料となることを期待できる。



研究論文の執筆・投稿

上述の調査結果をもとに、線引き都市に着目して立地適正化計画の効果的な運用への知見を得ることを目的として論文を執筆した。アンケート調査から明らかになった事実に加えて、積極的な都市構造を図るために独自の施策を展開している都市を取り上げることで同計画の効果的な運用について評価している。論文は日本建築学会の査読審査を通過し、計画系論文集に掲載されることが決定している。



来年度の活動予定

【低密居住市街地の検討】

今後都市の集約化が進む中でも、全ての郊外市街地が即座に捨て去られるわけではない。その様な市街地においても住環境価値を再検討し、低密度な市街地だからこそ送ることができる暮らしを見出すことは、全体として地方都市の持続性を向上させることにつながる事が考えられる。従って、郊外の低密居住市街地のモデル構築に向けて、

我が国における戸建て既成市街地を事例に調査し、空間のハード的な側面に着目してその特徴を整理する。また、事例の調査を通して今後の社会状況に対応した低密居住市街地の必要条件を洗い出し、市街地構造のモデル形成における知見を得ることを目標に活動を行なっていく。